

小さな世界に住まうなかれ

表えたりとはいえず日本の一人当りの所得はなお世界の最高位のレベルにある。しかし先進国の中で現状への不満が最も多く鬱積しているのが日本人だ。国際比較調査についての報道を、最近ある新聞で読んだ。調査結果は真実を映し出したものにはがいない。その原因は日本の歴史伝統をネガティブに評価せず、「公」に生きぬくことと意義を若者に伝えようとする

は響きは麗しいが、実際には躍動感に乏しく混沌たる価値観の現代を生きる若者達に、少しでも生きて在ることに意味を美感させたい。その実感が若者の成長の源泉になるはずだと思いたい。入学式や卒業式の告辞はもとより、大学や学生団体の広報誌などで私はその思いばかりをこぼして来たような気がする。

シリーズ 新しい年へ

ない日本の教育の在り方にあるのだと私は思う。そのことが若者に自分や自分の周辺の小さな世界に住まうことをよしとする消極的な傾向を定着させてしまったのである。

拓殖大学の学長職に就任して3年ほどが経つ。私達が教育しているのは日本の平均的な若者である。彼等を公に目覚めさせたい、拓殖大学をそのためのモデルにしたい、奉職中、私の胸をうねり満たして来たのはその思いである。「成熟の時代」といわれ「ポストモダン」とい

私利私欲はたれをこへら道

求しても、その向うにあるのは小さな自満足だけだ。私利私欲の追求だけでは、自分以外の何ものかのために生き、共同体や社会に献身するところから得られる、心の底から湧き出るような幸せは手にいれられない。「公」に生きようとはなにか。公に生きるとは、貧しき国々、虐げられし人々、弱い立場の人間のことについて思いを寄せ、彼等のために行動するということだ。経験してみればよくわかるように、そうしたいと思いと行動がわれわれをなせ

若人よ、「公」に目覚めよう

か名状し難い誇りと幸福に導いてくれるのです。人間とはそのような存在として創られているのだとさえ私には思われるのです。



拓殖大学学長 渡辺 利夫

のために何かをやりたいという気分は私達の青春時代より強い。しかし何をやらうらうのか、この「暖衣飽食」の日本の中でどう生きていこうか。フイリドンの信頼できる現地 NGO (非政府組織) と組み合

正論

「キーマウンテンと呼ばれる巨大なゴミの山で空き缶やポリ袋を拾って親の生計の糧にしている子供達が、麻薬などの悪の道に迷い込まないよう子供会を組織しそのお世話をさせる。そういった活動に1カ月ほど携わらせ帰国した彼等の顔には、自分以外の者のためになにがしかの貢献ができたのだという晴れがましさが浮かんでくる。

恵まれた。そういう仕事のことで、若者達は「共生」にもめざめるのである。

社会の中で得る「共生感」インドネシアの姉妹校と「協働」して、その姉妹校に隣接する貧困地域のコミュニティ・デベロップメントに両校の教員と学生の参加を得て、自治会の組織づくりを精進させた。この中で日本の学生が姉妹校の学生からインドネシア語を学び、姉妹校の学生が日本の学生から日本語を学ぶという「副産物」も生まれた。

拓殖大学長3年にして思うこと

わたなべ としお